

「十文字ことの生き方に学ぶ」授業実践報告

亀田温子, 橋本ヒロ子, 宮城道子

はじめに

本稿は、2009年度前期に新たに女性学関連科目の1つとして開講した「女性学基礎・十文字ことの生き方に学ぶ」に関わる授業実践記録である。女性学関連科目は、本学が1996年に社会情報学部を開設し4年制大学としての教育を開始して以来、常に複数の科目を置き、重視してきた。女子大学としての存在意義や教育目標にかかわる分野であり、創設者十文字ことの建学理念に深いかかわりをもつ科目群である。これまでも学内共同研究（2008年度「女子大学におけるジェンダー関連教育の展開を探る—全学ジェンダー基礎科目の実施を目指して」）により、担当者による検討を重ね、授業方法、内容について協議してきた。今年度新たに開講した「十文字ことに学ぶ」に焦点化した科目について、本稿ではその設立経緯、授業内容、学生の反応などを具体的に記録し、その成果・課題を述べるものである。

1 女性学関連科目の位置づけ

社会情報学部では、1996（平成8）年の開設から今日までの間に複数回のカリキュラム改訂を実施し、女性学関連科目のカリキュラム上の位置づけや教育方法の変更があったが、それぞれの時期に科目担当教員の協力・協議により、充実・強化がはかられてきた。1年前期の「ジェンダー論Ⅰ」（2単位）は基礎編として必修とし、1年後期は担当教員がそれぞれの専門分野についてジェンダーの視点から講義する「ジェンダー論Ⅱ-1」から「ジェンダー論Ⅱ-8」の8科目を開講し、このうち1科目（2単位）を選択必修としている。

一方、人間生活学部では、2000（平成12）年の開設当初より学部専門科目の中に「女性学概論」「男女共同参画論」が位置づけられ、その後、「女性学基礎」を共通科目に開設すると同時に学部専門科目から「女性学概論」を削除した。社会情報学部に比べれば、科目数が少なく、いずれも選択科目ではあるが、年々履修者が増加してきていた。

「ジェンダー論Ⅰ」「女性学基礎」については基本的に教員4人で担当するオムニバス形式による授業とし、4クラスを開講している。

2 創設者の生き方と建学理念を学ぶ授業の検討・試行

近年、女子大学としての教育目標の明確化や学生が建学理念を学ぶ必要性について、全学的な検討が始まっていた。オムニバスで実施している「ジェンダー論Ⅰ」「女性学基礎」の取りまとめ役となっていた橋本、宮城、亀田は、各クラスの導入部分で行っている学園の設立者である十文字ことの生涯や生き方に関わる内容をさらに発展・充実させることが、その検討の趣旨に合致するのではないかと考え、新しい「女性学基礎・十文字ことの生き方に学ぶ」科目の新設を企画した。単に創設者の生き方を知るだけでなく、女性学の学びの観点からも、学生の意欲の向上の面からも、また、本学在校生としての誇りや自信の根拠としても大きな可能性を持つものと判断したためである。この建学理念および創設者の生き方を学ぶ授業の開講は、教養教育開発センターの所管となり、両学部教務委員会に諮られたうえで、2009年度から科目開講が認められた。内容の検討に当たっては、女性学関連科目を担当している教員はじめ、複数の教職員から助言を得た。また、学園関係資料については、本学図書館や大学・短期大学同窓会若桐会からも協力を得ている。

3 「十文字ことの生き方に学ぶ」科目のねらいと授業構成

「女性学基礎は、社会の中で『女性であること』はどのようなことなのかを、様々な分野から検討する。」というねらいは、「女性学基礎」のいずれのクラスにおいても共通したものである。創設者十文字ことをとりあげるねらいは、つぎの3点にまとめられる。①十文字ことという一人の女性を入口に、時代

と女性の生き方，社会的活躍の背景を理解する。②女性を育てる教育に込められた建学理念の意味を確認する。③現代社会に生きる女性として，創設者の志と生き方から，自分の生き方につなげる学習とする。

今回の授業は，これまで「女性学基礎」を担当してした教員のうち3名（橋本，宮城，亀田）を中心にオムニバス形式で行った。シラバスに示しているように，十文字ことの生き方にかかわるキーとして，次の5つのテーマを設定した。

- ①新しい時代の女性（亀田担当）
- ②事業を起こす女性の先進性（宮城担当）
- ③政治参画の動き（橋本担当）
- ④身体と心の健康（ゲスト講師担当）
- ⑤こと先生の教えを現代に生かす（ゲスト講師担当）

第1回は専任教員3名によるオリエンテーション，その後各教員3週ずつのテーマに沿った講義9回，ゲスト講師による4回の講義，最終回は専任教員3名のよるまとめと講評とした。ゲスト講師として，養護教諭の金子由美子氏，また，十文字こと先生が十文字高校の校長であった時期に教員であった成田寿子氏，古松弥生氏をお招きした。ゲスト講師の回は，履習学生以外にも公開し，また，一部合同授業を行う試みも実施した。

4 授業概要

テーマに基づく授業展開は，以下に示す内容である。

4-1 テーマ：新しい時代の女性（ライフサイクルと教育）

十文字学園を創設した明治3年生まれの十文字こと先生とはどのような人物でどのような考えから女性が学ぶ学校を創設したのか，その時代と生き方から生涯をとらえる。またライフサイクルの側面に注目すると，こと先生は100年前の生まれでありながら，超現代女性といえる女性像が浮かび上がる。また，現代とは全く異なる社会・時代背景で女性が社会の発展にかかわれることが少なかった時代に，努力とチャレンジ精神を持つこと先生と同時代に活躍した羽仁もと子など，新しい時代の女性たちの動きをとらえるところまで発展させる。

◆第2回 「春風のように」視聴によりこと先生の生涯をとらえる

十文字ことの生涯をたどったアニメーションビデオ「春風のように」を資料として視聴しながら、その時代に起きた事柄や個人のライフイベントなどを記録する「十文字こと年表」を作成し、そこから読める事柄について意見交換する。

A. 生涯の出来事などを記入し「十文字こと年表」を作成する

途中で時代背景や関連の事柄について解説を加える。年表作成のための情報交換、部分的な再視聴などで確認を行い、基礎資料を作成する。この作成資料は、第3回のライフサイクルをとらえる基本データとして活用することで、次の授業につなげる。

B. 「十文字こと年表」を作成し、そこから読める事柄について意見交換を行う

意見交換をおこなうことで「個人の気づき・発見」を明確にし、また他の学生の意見から異なる視点があること、自分が気づかない新たな認識などについて相互に学び、視野を広げる。

〈学生の反応〉「私も世の中で少しでもいいから人の役に立つ人になりたい」「女性が社会に進出するのが大変な時代、自ら学校をつくり女性のためにがんばったこと先生はやっぱりすごいなと感じました」「十文字にこんな歴史があるなんてしらなかった。十文字の学生であることを誇りに思いたい」「いくつになっても教育に対する熱い思いをもっていたこと先生のように、私もそうありたい」「十文字ことという1人の女性の生きかたにとっても共鳴しました」と、自分がこの学園で学ぶことに自信と誇りを持ち、それを自らの力を高めることにつなげはじめている。ビデオ視聴から、学生たちは約100年前の「女に教育はいらない」とされた女性のおかれた状況、そうした状況の中で女性の教育機関を設立したこと先生の生涯を知るとは、学生生活の第一歩として重要な事柄である。それは、十文字学園の学生という自分自身のアイデンティティを確実にするために、また1人の女性が時代の中でどのように生きたかを自分に近い存在から知ることでもある。学習が自己形成につながる一面をとらえることができる。

◆第3回 ライフサイクルから探る—明治生まれの超現代女性

女性の生涯をライフサイクルという視点からとらえることで、明治生まれ

のこと先生が、実は現代を生きる女性たちと重なっている特性を持つ超現代女性であること、またジェンダーにとらわれず自身でキャリアを形成したその生き方を明確にとらえる。

A. 3世代の女性に見るライフサイクルの変化とこと先生を比較

図表資料から、明治生まれから現代まで3世代の女性のライフサイクルの動きを読み取り、そのライフサイクルの変化をとらえる。寿命の長期化、就学期間がのび高学歴化、出産期間の短期化（出産児数の減少）、子育て後の「ライフサイクル第3期」の長期化、などがあらわれてくる。

B. ライフステージによる出来事

幼少期は学校を途中でやめ家庭の仕事をしたが、勉強をしたい、学校を作りたいという夢を実現するために師範学校にすすむ高学歴女性となり、教師の仕事に就くキャリア・ウーマンの生活をする。29歳での結婚は当時としては晩婚であり、出産・子育てをしながら夫の事業のパートナーと成り自彊術の普及など社会活動にもかかわる。子育て後のライフサイクル第3期にあたる54歳で、学校の設立を行う事業主として学校長として経営の立場に立つ。教師ではなく学校を運営する立場にたち、リーダーとしての役割を果たし、当時女学校が少ないことから次世代の女性の教育機会を拡大する社会的な貢献をすることで、第2の人生を生きることになる。ことばだけでなく、ライフサイクルの図でとらえることにより、こと先生の生きかたが現代女性の生きかたと重なることが、学生は視覚的にも明確につかめる。

C. 意識や生きかた—ジェンダーにとらわれず、キャリアを切り拓く

「女に教育はいらない」という時代のなかで、学ぶことへの強い関心と向上心をもっている。『こと先生伝』のなかにおさめられている「力の養成」の文章を資料とする。積み重ねた練習によってえた「力」、自彊術を毎日行うことで体力の向上がみられる。勉強にも生活にも努力を重ね、学ぶことにより自己の内面を高める、家族に反対されながらも教師の道を歩み始めるなど、伝統的な女性の生き方ではなくジェンダーにとらわれない意識を持ち、自身でキャリアをつくる積極的な行動につなげる生きかたをしている。

〈学生の反応〉「現代の女性は自分が使える時間が増えていることを改めて確

認した」「100年も前の女性なのに、現代の女性ととても近いライフサイクルには驚いた」「自分自身でキャリアをつくったことにすごく関心をもった」「こと先生は現代女性の代表だとおもった」など、キャリアを切り開いてきた存在であることを強く感じていることがうかがえる。

◆第4回 女性に対する教育—同時代のチャレンジする女性たち

こと先生と同時代に生き、女性の地位が低く社会での活動はしにくい時代に、社会を切り開いてチャレンジする多数の女性たちの存在をとらえることから、女性として自信をもち、自分たちの現在の生きかたをとらえなおすことにつながる。

A. 明治時代の女性の地位の低さ・女性への教育

家制度の存在や、男尊女卑の考え方、明治民法において法的・社会的地位をもたなかった明治時代の女性たちではあるが、一方では近代化による学制の成立で、女子も教育を受けることが可能とはなった。

資料から、明治期の女性の生活、明治5年の学制により女子の小学校入学が可能となり、その後の良妻賢母主義教育の展開などをとらえる。明治3年(1870年)に生まれたこと先生は「春風のように」で描かれているように、女に教育は必要ないという時代に育ちながらも、学びたい、社会で役立つことをしたいというチャレンジ精神を強く持っていたことがわかる。

B. 同時代のチャレンジする女性たち

こと先生は1922年に文華学園を創設するが、同時代また東京の池袋・巣鴨付近という同地域で活躍した女性たちについての資料を基にとらえる。1921年に日常生活そのものが教育となる「自由学園」を設立した羽仁もと子、1924年には女性自らが自分の力を発揮する「自覚せる婦人」を養成することから「川村学園」を設立した川村文子、医学と栄養学を基礎として後の女子栄養大学の母体となった活動を展開する香川綾、また日本で初めての知的障害児施設「滝野川学園」を開学した石井筆子などを、資料をもとに紹介。社会の新たな動きを作り出す動きがこと先生を囲んでいたことを知る。

〈学生の反応〉女性の動きを歴史の中でもあまり学習していない学生にとって、活躍をしている女性が数多くいることに多くの学生が驚いている。「こ

のような女性のがんばりにより、いまのような男女平等という世界ができたんだ」「チャレンジしている女性がたくさんいるなんてびっくりすると同時に尊敬しました。我を持っていて凄いと思いました」などである。女性の歴史を学ぶ中から、学生たちが女性である自分に自信を持つなど Self-Esteem が高まり、自分たちもという積極的なチャレンジを生み出していることは、次のことばからもわかる。「社会にチャレンジしてきた女性の過去を知らずにわたしたちは普通に授業を受けていました。自分も社会にチャレンジできるすばらしい女性になりたい」「女性が自らが輝く太陽のようになりたいと思って努力する姿はすばらしい。私も何かに向かって努力する人になりたいと思った」など、教師ということ先生の姿を自分のロールモデルとして明確に認識する姿勢が語られている。

こと先生を基にしたチャレンジする女性たちの学習が、学生自身の「女性であること」の自信を高め、さらに自身が積極的に生きる姿勢を作り出すエンパワーメントとなっていることが明確にとらえられる。

〈課題レポート・今後の課題〉

こと先生の生き方・生涯から学んだことをレポートとして自分で文字化することで、知識と同時に自分のとらえたことを確認し定着させる良い機会となっている。さらに、そうしたこと先生の思いから創設された「十文字の学生となれたことを誇りに思います」という言葉からは、創設者について、またその建学精神を学ぶことが、学生自身が自信と誇りをもち自尊感情を高めることにつながり、エンパワーメントの作用を及ぼすことが強く感じられる。今回のこの受講生たちは教師を目指している学生たちが多数であり、その作用が一層強かったとみることができる。

提出された課題レポートは、同時代の女性の活躍については、その生涯、人物情報など非常に細かくとらえており、まとめ方も工夫がみられる。これを発表し授業に活用することは今後の課題としたい。

4-2 テーマ：事業を起こす女性の先見性

十文字ことは、本学園創設という教育事業に取り組んだ女性であり、夫の事業のパートナーとしても尽力している。こうしたことは、当時の状況においていかに先進的なことであるかを理解する。経営参画によるエンパワーメ

ントや、その志が建学の理念にいかに関わりついたかを検討する。ひいては、現代における女性たちの起業の意義、また、営利および非営利の目的を持つ事業や、民間・非民間の事業の理解を深める。

◆第6回

A. 起業－事業を起こすとは

事業を、民間営利事業ばかりでなく、公共事業や民間非営利事業も含めて考えるとき、それぞれの目的によって主体も組織原理も異なる。だが、いずれの事業も、それぞれの時代と社会を反映したものであり、その存続には、人々の共感と支持が必要であることを理解する。

B. 事業の種類－法人格から考える

権利主体としての法人格および法人事業と個人事業（自営業・自由業）の違いを説明する。さらに、法人の種類（株式会社、協同組合、NPO 法人、学校法人等）について説明することにより、事業が制度化されたものである以上、経営者には社会的責任・権利・義務が生じることを理解させる。十文字ことこの時代と現在の女性の法的立場の違いに気付く。

C. 事業にかかわる5つの関係者

事業を中心に、出資者・経営者・労働者・（素材）生産者・消費者という利害関係者が存在し、それぞれの関係の中で、事業が新たな価値を生産することを理解する。生産者が出資する、消費者が出資する可能性も協同組合の例で説明。

◆第7回

A. 女性起業から学ぶ

農村の女性起業の事例をあげて、①志とビジネス（運動志向と営利志向）、②経営参画とエンパワーメント、③経営者の義務と責任と権利、④継承と持続、⑤オールタナティブであるということなどを講義。後期の選択科目「ジェンダー論Ⅱ-5（女性と起業）」と重なる部分もあるが、起業が時代的影響を受け、社会的存在であることを理解できるよう配慮。

◆第8回

A. 改めてこと先生の起業とは

前回の講義を受けて、あらためてこと先生の起業の志・ビジネスとは何か振り返り、本学の建学理念の意味を考える。また、こと先生が夫の事業

に経営参画したことが自らの起業におけるエンパワメントとなった可能性や、当時の女子教育が社会にとって有益な人材を送り出す上で重要であったことを確認した。

B. 現在における起業

NPO 法人が認められる事業分野が、法改正によって 12 分野から 17 分野に増えたことを紹介し、現代社会で非営利の事業が求められていることを説明した。現在、話題となっているコミュニティビジネスや社会的企業・社会起業家について、新聞記事なども参考にして紹介した。農村部におけるカンントリービジネス（女性起業・地産地消・グリーンツーリズム）にもふれ視野を広げる予定であったが、十分な時間がなく、最後の部分はごく簡単な紹介にとどめざるを得なかった。

学生の反応： 経済や経営という言葉に苦手意識を持っている学生、あるいは社会の出来事について難しいことはわからないと思っていたという学生も、女性たちが事業を起こした具体例については、興味を示し、もっと知りたいという意欲をしめした。また、法人格の説明においても、大学生協を例に組合法人を、本学を例に学校法人を、アルバイト先を例に株式会社をというように、身近な事柄と結び付けた説明には、よくわかった、面白かったという反応が得られた。3 回の授業にしては、やや内容を詰め込みすぎ、説明が不十分だったかと思うが、学生各自がそれぞれに、自分の関心につながる部分をみつけたようである。

本学が十文字ことの起業の成果であり、事業の継続の実例であることについて触れた学生はなかった。唯一、十文字ことについて述べられた記述を紹介しておく。「女性起業の勉強をした後、もう一度、こと先生の時代のことをみてみると、本当にこと先生はすごい人なんだと感じました。そばにいた夫も、理解があって、こと先生のことをわかってくれる人だと思いました。」

学生の課題レポートから

授業のまとめとしての課題レポートのテーマは、「いま求められる事業」とし、各自が現在の社会や生活を見渡して、こんな事業があるとよいのではという提案をまとめることとした（1600～2000 字程度）。レポートの構成例として、以下を示した。

構成の例：1 はじめに

現代の事業をどうみるか？どうとらえているか？

どんな立場から提案したいか？

2 新たな事業の提案

提案する事業の目的・具体的内容・特色等

その事業の必要性

事業を起こすために必要なもの、課題

3 その事業における5つの関係者の予想

出資者・経営者・労働者・生産者・消費者

4 私の関わり方

5 結論

学生たちがレポートにおいて提案した事業には、以下のようなものがあった。

- ・食と健康・美容をテーマとした女性雑誌の編集・作成・出版
- ・短時間保育や、病児や障害児にも対応できる保育事業
- ・太陽光発電の普及・啓発事業および商品開発事業
- ・地域の子育てネットワークを支援する事業
- ・楽しめるエコツアー事業
- ・老人ホームへの美容・理容・メイク・エステ等の派遣サービス事業
- ・衣料品のリサイクル事業
- ・家族ふれあい事業（家族ぐるみで参加し、他の家族と交流）
- ・出産後の女性の就職支援センター事業
- ・多様な年齢の人がコミュニケーションでき、ストレス発散できる事業
- ・消費者の視点を生かした食事関係の事業

学生たちの事業の提案は、もちろん各自のアイディアレベルのものであるが、すでに一部実現しているものもある。提案として具体性や新規性を評価するのは難しいレベルのレポートではあるが、自分の生活に必要なモノやサービスを提供している事業が、立場の異なる人々の分業の成果として実現していることは、十分理解できたのではないと思われる。また、提案している事業は、インターネットで見つけた事業であっても、自分がどのように関わるかという点を考えることによって、事業としての成立の可能性を幾分

かでも検討した様子が見受けられた。事業が時代や社会のニーズによって変化することの理解は進んだようであるが、自分が経営しない場合でも、消費者や出資者として事業の存続に影響力を発揮できる可能性については、理解の差が見られた。

4-3 テーマ：身体と心の健康

十文字こと先生が重視した女性の健康や体の問題についても、重要なテーマとしてとりあげた。内容的には今日の時代における事柄ということで、現在中学校で養護教諭をされている金子由美子氏をゲスト講師とした。

◆第9・10回 女性と健康・身体と性

中学・高校生が向き合っている家族、地域、学校生活が心や体の問題に大きくかかわっていること、消費社会で子供が消費の対象とされていることなど、保健室からわかる事柄を中心とした話とパワーポイントによる資料紹介。

A. 生存権を侵害されている状況：生存権を侵害されている状況として、親が就学援助についての知識を持たない、家の中に親がいない家庭内ホームレス状態、虐待、保険証の失効などの状況がある。経済格差のなかで厳しい状況に置かれた子供は、自己肯定感が低く、そこから自分たちを落ちこぼれとらえてしまう傾向がある。

B. 発達成長を受け入れられない心：大人の体になりたくない、大人の世界に入りたくない気持ちが、自傷行為、拒食症、リストカットなど自分の体に向けての行為、化粧やファッションといった外形の変化を追う行為、恋愛、ケータイやゲームなどによる他者とのかわりの中での行為、などとなって現れる。孤独やコンプレックスを持つ一方、自己顕示欲を強く持つこともある。現代の消費社会では、雑誌やさまざまな商品など業界が子どもたちを対象にさまざまな物を売り込む状況がある。こども自身のメディア・リテラシーの力を教育の中で高めることが重要である。

C. 性意識・ジェンダー・バイアスの迷走：社会的につくられる女らしさ・男らしさについて「月刊ポップティーン」などのメディアを見ると、女の子に向けたダイエットやプチ整形などの情報から、お金をかけて痩せること、外見を装うことが女らしいことであるというメッセージを多数送っている。情報と消費社会が「らしさ」を作り上げている実態を、雑誌写真な

どを見ながら批判的に読み解いていく。

- D. 男女の体・性：男性・女性のからだについて、障害者と身体・性、性同一性障害、クラミジアなどの感染症について、保健室に来る生徒たちの状況から自分の体についてほとんど知識を持たない子どもたちの状況がある。女性の生理と体調についても、体のチェックから健康を考えることが重要である。

学生の反応：この授業は学生にとって身近な内容が多く「大変興味深かった」という意見が多かった。子供たちのおかれている最近の状況から、商品はたくさんあるが決して豊かではない子どもの成長環境などが改めてとらえられている。いわゆる勉強の面だけでなく生活や心・体の面から自分を、子供をとらえる重要さを知り、さらに健康な体でいることの重要性、性の悩みをもつ子供や若者の生きにくさなどについて考える機会となった。現代社会の「人」を理解する上で大変重要であり、他の授業ではあまり扱われない事柄に学生たちも大きな関心を示した。学生たち自身は、体について知らず体と向き合っていない自分自身に気づく一面と、多様な環境で育つ子どもたちの状況を理解する教師としての自分という一面と、2つの面から話をとらえている。自分が先生になった場合を想定して、子どもたちの様子を気にかけながら、その子のかかえる悩みを受け止め理解できる、そうした教師像を描いている。

4-4 テーマ： 政治参画の動き

日本女性が参政権を得たのは、十文字ことが75歳の1945年である。傑出した教育者である十文字ことが、初めての選挙権行使にあたって何らかの見解をだされたのではと予想した。しかし、『十文字こと先生伝』には、自身が書かれたものにも、また、多くの方の追悼の言葉などにも、十文字ことと政治との関わりについての記述はみいだせなかった。十文字ことは女子教育に功績があったため、女性と政治に関する発言があったとしても、記録にとどめなかったのかもしれない。さらに、十文字ことが生きぬかれた時代は、女性が政治について意見を述べるのは例外的なことであったのかもしれない。いろいろな理由や背景が想定される。

十文字ことと夫の大元氏との関係は後述するように、男女共同参画社会基

本法の前文で明記された「男女共同参画社会における自立し協力する男女のパートナーシップ」を具現化したものであり、極めて現代的と言える。

なお、十文字学園第二代理事長を務めた十文字良子氏（1912 - 1987）は、占領軍に先立ち、女性参政権付与を幣原内閣に提案して認められた堀切善次郎内務大臣（市川房枝記念会制作ビデオ「婦選は鍵なり 上」）の姪で、1929年に衆議院議長に就任した善次郎の兄堀切善兵衛の長女であり、女性参政権獲得という点で、女性の政治参画との接点が見いだせる。

◆第11回 十文字ことの生誕と成長、学園の発足、発展と女性の政治参加の進展：女性の政治参加に焦点を当てて。

- A. 戦前の日本女性の地位について簡単なクイズの実施
 - B. クイズの答え合わせをしながら、あわせて世界の女性が参政権をどのようなプロセスで得たか、簡単な説明。
 - C. 市川房枝記念会作成の「婦選は鍵なり」ビデオ1の1946年の第1回総選挙までを視聴させた。日本では、女性たちが参政権を得るためにどのような運動をしてきたか、1870年の十文字ことの生誕、十文字学園の設立と発展を織り込んで説明。
 - D. 1946年の国連女性の地位委員会の発足、1975年の国際女性年、1976年—85年の国連女性の10年及び世界女性会議の開催など、国連における女性の地位向上のための活動、それが各国でどのように実施されてきたか日本を中心に言及。合わせて、1965年十文字学園短大の設置や1996年四年制大学の発足が男女平等運動や国際的なイベントに連動していたことを説明。
- 学生の意見：一様に戦前の日本女性の無権利状態に驚いていた。例えば、ビデオで見た戦前の日本や女性の無権利状態が全く他国の様な印象を受けた。平塚雷鳥、市川房枝、奥むめおなどの努力がなければ、今の自分たちの権利もなかったと認識。敗戦という状況がなければ、日本の女性は権利を得られなかったのではないかと気づいたなど。

◆第12回 女性の政策決定の参加と女性が政治に参加することのメリット

- A. まず、世界で女性の政治参加がどのような状況にあるか、列国議会連盟の女性国会議員ランキングを配布して説明。日本は140位という低さに注目させた。

B. 女性の政治参加の必要性。女性政治家の政策の特徴について事例をあげて説明。世界女性国会議員ランキングで、日本の順位が年々落ちていること、地方議会や首長の女性割合の動きも紹介。女性の政治参加を増やすためのクオータ制度（ポジティブアクション）により、90カ国以上で女性議員の割合が増えていることを説明。

C. ビデオ視聴：『政治への参画』という「ミレニアムの女性たち」シリーズ4のビデオの一部（ナイジェリアとカリブ諸国の女性議員の活動）を視聴し、女性の政治家がどのような政策を持ち、活動しているか知り、考える材料を与えた。

学生の意見： まず、日本における女性の政治参加の低さに一様に驚いていた。ビデオで、カリブの女性政治家が、強姦による女性の心身のダメージやPTSDの深刻さを配慮すると、犯人男性の男性自身を切り取ることを定めた法律の改正を提案していたが、そのアイデアに賛成する学生もいた。女性政治家の特徴を書かせた際、「女性の力が国を変える」というビデオでの発言を印象的に書いていた学生や、国を変えるほどの女性政治家になるには強い意志が必要だと書いた学生が数人いた。

◆第13回 女性の政治参加で社会を変えられるか：地域社会を焦点に

A. 国際的に女性の政治的・経済的地位が極めて低い日本では、1975年以降、政府が進めてきた男女共同参画政策の拠り所となる法律として、男女共同参画社会基本法が、遂に1999年に制定された。十文字こと・大元夫妻の関係は男女共同参画社会基本法の前文にある「男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会」のモデル的な関係であることを説明。

B. 女性政治家が中心になって制定した法律（日本－児童買春・児童ポルノ禁止法、配偶者からの暴力防止および被害者の保護に関する法律など、フィリピン－女性のためのマグナカルタ、加害者に極刑として死刑もある「強姦禁止法」など（死刑の執行などで「強姦禁止法」が世論的に批判され、強姦禁止法を主になって提案した女性議員は選挙では落選）説明。イラク戦争やアフガニスタン攻撃に反対したアメリカの女性議員の話。

その上で、次の2つの記事のコピーを配布し読ませ、意見を述べさせた。

ア. 女性政治家の特徴を明確に紹介している「ファム・ポリテイクス」(no.64 2009)掲載の堂本千葉県知事へのインタビュー記事

イ. 裁判員制度で性犯罪が扱われることで、性犯罪犠牲女性のプライバシーが守られないことを女性グループが問題にして、最高裁に申し入れをし、最高裁で検討中という東京新聞の記事：申し入れにより始めて、最高裁は裁判員制度では性犯罪を他の犯罪と同じように扱えないことに気づいた。そのため、裁判員制度の法律改正も含めて今後の対応を検討しているという記事から、市民運動により法律改正も可能性があることを学生たちが認識。

C. 課題にした「地域における女性政治家の特徴調査」について

今回の授業の課題は、自分が住む地域の議会における女性議員の割合、女性議員がどのような政策を持っているかネットによる調査をして、それらに対する自分の意見も入れたうえで、レポートを作成すること。しかし、無党派議員は議会報告を始めネットによる情報提供を活発に行っており問題がないが、最近減少傾向にある。増加している政党所属女性議員の場合、ネットで情報を流していないことが本課題を実施する場合の障害として明らかになった。無党派議員の提供する情報は概して、議会活動も含め詳しく、当該議員の重要性・存在意義を読者に訴える内容である。ネットで情報を出していない政党所属市町村議員しかいない場合は、在住都県の女性議員についてのレポートでも可とした。

学生の意見：女性でないといけないことが多いので、政治家に女性もなることが必要。自分が性犯罪の被害者になったら、状況について他人に話したくないので告訴しない。裁判員制度で、性犯罪を扱ってほしくない。強姦罪が強盗罪よりも軽いことにショックを受けた等。

課題レポートの内容から

- ア. 対象とした自治体：上尾市、草加市、所沢市、戸田市、新座市、和光市、埼玉県、足立区、江東区、杉並区、練馬区、東久留米市、我孫子市、野田市、富岡市
- イ. 女性の政治参加の状況：和光市のように女性議員の割合が全国の市で1.2位を争う市、女性が区長の足立区、女性議員の割合が激減している埼玉県議会など多様な状況である。報告する時間がなかったため、来年も類

似の課題を出すとすれば、報告できるようにレポートの提出を早めることも検討課題である。審議会における女性の割合についても調べてきた学生がいた。

ウ. 女性議員の政策の特徴

学生たちは、政策の特徴を調べるために、女性議員の議会での発言も含めた活動報告を調べていた。主な領域としては、保育、子育て、教育、子ども医療の無料化、交通安全、環境、消費、介護など福祉、指定管理者としてのNPO、NPOの寄付控除など、男性議員が気づきにくい身近な内容を多く挙げていた。議員が男性中心になると、これらの領域が抜けてしまう、もしくは行政だけが内容を作り市民の視点が欠けてしまいがちになるという結果になる可能性が高いことに気づき、その点を強調した学生が数名いた。

エ. 今後の課題

レポートでは、女性議員が少ないことをあらためて認識し、その数を増やすことをすべての学生が提案していた。しかし、提案するだけではなく、女性議員を増やす活動などに参加すべきではないかと思うが、そこまでの意思を表明した学生はいなかったのが残念である。誰かが変えてくれるのを待つのではなく、可能な範囲内で、自分から政治を変える運動に加わると決意するほどの意識の啓発には進まなかった。しかし、多様な問題に取り組む活動や意見を持っている女性議員を特定できたようである。

学生たちが、今後は地元自治体の議会や首長の政策、主張などについて注目し、選挙権行使の際は、女性に限定せず最も適切な候補者に投票をすることが期待できる。

4-5 テーマ：こと先生の教えを現代に生かす

直接十文字こと先生に接しておられた十文字学園の成田寿子先生、古松弥生先生をゲスト講師に迎え、女性リーダーとしての側面に注目して語っていただいた。

◆第5回 自強術体操指導

こと先生の指導を直接見ておられた、元十文字高校教頭の成田寿子先生（現

在 85 歳) が体育館で実際に自強術の指導を行い、学生たちはその指導で体操を行った。当日は成田先生だけでなく、卒業後も自強術体操を続けている 70 歳代の十文字学園卒業生 3 名が同行され、ともに指導役となった。31 の基本動作の説明はじめ、学生の中に入って個別指導もされた。体育科目(平田先生担当)と合同授業を試みた。

こと先生は「心身の健康な女性を育成する」ことが根本精神であり、世の中の役に立つ有用で立派な女性の育成ということから「健康な体、確固たる精神と、自由に活用できる知識を持たなければならない」とし、自らこの体操の教師役となり生徒や職員を指導された。夫の大元先生の体調回復に役立ったこの自強術を、学校の正課として取り入れたのである。学園では毎朝校庭に生徒・職員がそろい、この体操を行った。成田先生ご自身は、体育教師として毎朝号令をかけて高校生の指導にあたっていた。

〈学生の反応〉 事前に資料で若干の説明はしたものの、学生たちにとっては初めての取り組みであった。現在 80 歳を超えた成田先生の元気な姿に関心を寄せ、自信を持って取り組んでいる諸先輩の姿を「体操をしている成田先生たちが輝いてみえた」と、その素晴らしさを素直にとらえている。「十文字の文化を体感でき、勉強になった」「古くから伝わっているこの体操に誇りを持ち、日々の中に取り入れていきたい」など、実際に成田先生から指導をうけたことにより、自分達も十文字の歴史につながっていることを認識した重要な学習の場となったことが改めて理解できた。

◆第 14 回 女性リーダーとしての十文字こと先生—こと先生の教えを現代にいかす

本学短期大学部名誉教授である古松弥生先生は、十文字こと先生と同様、東京女子高等師範学校に学び、卒業後、十文字学園中学校・高等学校、短期大学(現短期大学部)と一貫して本学園で教鞭をとられた。中学校・高等学校の校長先生であったこと先生のもとへ着任の挨拶に向った時のエピソードからはじまり、「十文字こと伝」に記録されていること先生の言葉や、周りの人々がこと先生を語った言葉などをひきながら、その教えの意味を語られた。

「十文字こと伝」から引用された文章は、言葉遣いのうえでも、学生たちにはややわかりにくい表現が多いと思われるが、古松先生の講義をききながら資料を読み、理解を深めたようである。こと先生がどのような場面で、そ

の言葉を使われたのかを知ることにより、理解が深まったものといえよう。「力の修養」「粒々皆辛苦」「子供は叱らないで育てよう」といったこと先生の言葉や考え方を学生は印象的に受け取っている。また、それまでの講義で理解したつもりだったが、新たな発見を感じた学生もあり、フィードバックシートには「自ら進んで物事を変えようとする意志がすごい」「努力の仕方もととても尊敬すべき」「大事なことは現実を受け止めて、次の行動にどのように生かすことができるかだ」というような記述がみられる。

古松先生は講義の最後に、塩野七生氏の「ローマから日本が見える」(集英社文庫『英雄の通信簿』2008年9月25日)の一文をひき、指導者に求められる資質について触れられた。イタリアでは、指導者の資質として、決断力、実行力、判断力などは当然もつべきもので、それらを超えるものとして、①知力、②説得力、③肉体上の耐久力、④自己統御の能力、⑤持続する意思が挙げられているという。さらに「カエサルだけが、このすべてをもっていた」といわれるそうである。最後に古松先生は、「こと先生こそ、この5つを持っていた」と締めくくられた。

学生たちの感想には「古松先生にわざわざお越しいただいて貴重なお話を聞かせていただき、あらためてこと先生からいろいろなことを学んだ気がしました」「古松先生が一生懸命話してくれて嬉しかった」「とてもリアルで、お話を聞けてよかったです」など、生前の創設者を知る方が自分たちのために講義されたことへの感謝の思いを記したものも多い。また、「夢をもっていれば困難なことも乗り越えられる」「自分のことだけ考えるのではなく、もっと広く考えていきたい」「こと先生のような素晴らしい女性を目指して生活していきたい」「こと先生の教えを胸に自分も頑張ろう」など、自分の今後の生き方に結び付けた記述も見られ、古松先生の話を通して、こと先生の生き方が学生に届いたことがうかがわれる。

5 今後に向けて

この試行的授業の実施により、十文字こと先生の生涯を学ぶことは、女性学を学ぶ上で効果的であるだけでなく、本学の建学理念を理解し、本学で学ぶ意欲や誇りを自覚することにきわめて有効であることが確識できた。学生

の受講後の感想には、こと先生の生き方を知ることにより、自らの今後の人生への指針を得たというものが多くみられた。

建学理念を伝えるためには、その意味を学生に語りかける機会が必要である。また、建学理念がどのようななかで生まれたのかを知ることが、現代においていかなる意義を持つのかを考えるきっかけとなる。十文字こと先生の生き方を理解することによって、本学の建学理念は、創設者から現代の私たちへのメッセージだと実感をもって理解することができた。

大学において共通科目のありかたが多様に議論されている時である。学生にとって自分がその大学に所属すること、そのアイデンティティを確立するためにも、1年次にこうした科目を開設することはきわめて有効であるといえよう。本学においても現在共通科目の検討が行われており、これまでの女性論科目開設の経緯を踏まえて、あらたなカリキュラム作りがすすめられていることは、大きな意味を持つことと言える。今後、より多くの学生がこのような科目を受講できるようにするためにも、多数の教員が担当できるシステムづくりの検討を行いつつ、さらなる展開につなげたい。

参考文献

- 十文字学園十文字こと先生伝刊行会（1961）『十文字こと先生伝』三陽社
十文字学園七十年史編集委員会編（1992）『十文字学園七十年史』学校法人十文字学園
亀田温子（2007）「立ちてかひある一十文字こと略伝」十文字学園『新座だより』24号、25号、26号
横須賀薫監修、横須賀薫・千葉透・油谷満夫著（2008）『図説教育の歴史』河出書房新社、
十文字学園編集（2002）『自彊術体操』

